

君の「秘密基地」はどこにある？

幼い頃、実家の裏に空き地があった。近所の子どもたちにとって格好の遊び場だった。敷地の片隅に古びた木造の物置小屋があって、我々自称少年ギャング団は、その中に、筵(むしろ)や家で使わなくなった布団や家財などを持ち込んで、『秘密基地』に見立てて遊んだものだ。わくわくドキドキ楽しかった思い出がいっぱいいっぱいいつまっている。

映画「スタンド・バイ・ミー」、小説「トム・ソーヤの冒険」、マンガ「20世紀少年」などでも、『秘密基地』は重要なキーワードや舞台として物語の大きな要素となっている。

さて、先日、たまたまテレビをつけたら、NHKの「チョコちゃんに叱られる！」という番組で、「なぜ子どもたちは『秘密基地』を作りたがる？」という内容を扱っていて、とても興味深く視聴した。

子どもたちが『秘密基地』を作るには、それなりの理由があるとのことで、ある大学の先生がその理由を解説していた。その内容は以下の通りだ。

我々人間も含めた動物は、自らの命を守る行動として本能的に3つのパターンを身に付けている。それは、「戦う」「逃げる」「隠れる」である。

その中の「隠れる」という本能が、『秘密基地』を作りたがる行動に駆り立てる。どうやら、生き延びるために、危険に対して準備をしておかないと気が済まない本能が働くらしい。つまり、子どもが『秘密基地』を作りたがるのは、無意識に命を守る行動をしている。自分たちが設定した世界で大人に見つからない練習をしている。とのことだった。

さて、それでは、巷に自由に立ち入ることのできる空き地や廃屋がなくなり、集団で外で遊ぶ機会のめっきり減少した現代の子どもたちにとって、『秘密基地』なんてあるのだろうかと思ふと考えた。

そして、そうだ、それはネット空間ではないだろうか、との思いに至った。

『秘密基地』とは、親や他人に知られたくない自分たちだけの場所や空間であり、そういった意味では、見方によっては、昔と比べることができないほどセキュリティが働いているのも、ネット空間ならではのかもしれない。そして、『秘密基地』が、自らの命を守る行動であるならば、子どもたちがネット社会に夢中になることを、我々大人が、嫌悪したり全否定したりすることは、もちろん間違っているのではないだろうか。

一方、リアルの『秘密基地』は、秘密といっても、親や大人はその存在やそこで何が行われているかも薄々わかった上で、容認し許容し秘密のふりをしてあげていた。例えば、家の中での、押し入れや炬燵の中もれつきとした『秘密基地』だと言えるが、幼い子に「あれ、〇〇ちゃんがない。どうしたんだろう？」なんてわざとお母さんが本人に聞こえるように言って、身を隠していたつもりの本人が出てきて、母親が大げさに驚いたりしてあげると本人が大喜びするのは今でも見られる光景だろう。

このように、もちろん実質は決して秘密ではない。我々の少年時代も、親に内緒のつもりで、『秘密基地』でそれなりにいろいろな遊びや悪ふざけや、いたずらの相談事や、ちょっとした秘め事をしていたかもしれないが、その実、親たちは、ある程度のことは把握していたのだと思う。

ところが、ネット空間はやっかいだ。子どもが、どこのだれとどんな会話ややり取りをしているかまでの詳細や全容はもちろん把握できてないし、自分の子どもを取り巻く『秘密基地』の広さや、そこで結びつく人間関係の実態や雰囲気もわかってないはずだ。真の秘密の場所に陥りやすい。

そして何より心配されるのは、子ども自身はそこを『秘密基地』と思っているかもしれないが、結局は、容易に第三者に見つかってしまう可能性もある『秘密基地』であり、いつでも危険にさらされる可能性をも秘めている『秘密基地』なのである。

先週5月6日(金)に、警察庁・文部科学省発行の「守りたい大切な自分大切な誰か」(全校配付)と、新潟県保健福祉部発行の「スマートフォン等のインターネットトラブルからお子様を守るために！」(1年生のみ配付)を家庭配付した。

これらの類のリーフレットは、もちろん全国・全県・全市に配付されているわけで、作成にあたっては相当な費用と人的労力がかかっていることだろう。つまり我々の血税が膨大に投入されているということだ。

また、様々な機会を通して、情報モラルに関する講演会等が学校でも地域でも実施されている。これらの啓発の手段や機会を決して無駄にせず、ぜひ、保護者にも先生方にも有効に活用してほしい。

それは、現代の子どもの『秘密基地』の存在を、リアルの『秘密基地』同様、大人や親の手のひらの上で踊っている存在にするためだ。

自分の身は自分で守るのは子どもとしての本能かもしれないが、親や教師には、自分にとって大切な子どもたちをしっかりと守り、他の人間に決して迷惑をかけないように子どもを正しく導く大人としての重要な責務がある。

「ポーっと生きてんじゃねーよ！」とチこちゃんに叱られることが決してないように。